

【執筆者略歴】

上嶋 悟史（じょうしま・さとし）

一九九三年、岐阜県高山市生まれ。二〇一八年三月、神戸大学大学院博士課程前期課程（社会動態専攻、美術史）修了。同年四月より後期課程に進学。二〇一八年八月より二〇一九年七月、国立台湾大学藝術史研究所交換留学生（博士班）。二〇一九年四月、日本学術振興会特別研究員（DC2）。二〇二〇年一月、宮内庁三の丸尚蔵館学芸室研究員。

論文に「江戸時代後期における相国寺派の動向と円山心挙、原在中の『釈迦十六善神像』制作」（『美術史』第一八八冊、二〇二〇年三月）などがある。

小口 康仁（こぐち・やすひと）

一九九二年、埼玉県生まれ。二〇一八年三月、学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻博士前期課程修了。現在、一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻歴史社会研究分野（社会史日本）博士後期課程に在籍。日本近世絵画史を研究。論文に「曾我物語図屏風」の展開―富士巻狩・夜討図から富士巻狩図へ―（『國華』第一四九六号 國華社 二〇二〇年）などがある。

松浦 靖也（まつうら・せいや）

一九九六年、栃木県下野市生まれ。二〇一九年三月、東北大学文学部人文社会科学卒業。

大野 真実（おおの・まみ）

一九九六年、宮城県生まれ。二〇二〇年三月、東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻（東洋・日本美術史専攻）博士課程前期二年修了。同年四月より、福島県須賀川市文化振興課で学芸員として勤務。

杉本 優（すぎもと・ゆたか）

一九六九年、東京都生まれ。一九九八年、早稲田大学大学院文学研究科芸術学（美術史）専攻修士課程修了。二〇〇九年四月より十年間、西陣和装学院（京都市上京区）にて着物講師をつとめる。本財団理事。論文に「尾張名古屋における書画会について」（『美術史研究』第三十六冊 早稲田大学美術史学会 一九九八年）がある。

【編集後記】

今回は五編の投稿があり、そのうちの四編を採択した。採択率の高さに驚かれるかもしれないが、これは投稿された段階で十分でない判断しても、なんとか美術史の論文として通用するよう、数ヶ月にわたって筆者と検討を重ねて改稿いただいた結果である。懇切丁寧に指導いただいた査読委員の方々にも、改めて感謝申し上げる次第である。

年度末には東北大学の東洋日本美術史、美学西洋美術史をあわせ、およそ二十本前後の卒業論文と修士論文を審査する。内容は多岐にわたるため、それぞれの事実関係をひとつひとつ確認しながら評価するのはほぼ不可能である。そこで重視されるのは、論点や議論の明瞭性、文章構成や論証手順の正当性など、つまりは何らかの事象を探究するうえでの論理性の有無、ということになる。特に卒業論文については、そもそも「論文」としての体裁を成しているかどうか問われるのだが、実際に審査してみても驚いたのは、すでにこの段階で学術誌に発表できると思えるものが含まれているという点であった。東北大学に赴任して一年目、卒業論文の審査というものを初めて経験した際に触れたのが、まさに松浦靖也氏の論考である。

そのような状況で気付かされたのは、たとえ論文のなかに優秀なものが含まれていたとしても、本人が研究者の道に進まなければ多くが捨てられてしまう、との事実であった。それと同時に、審査する立場にある「大学の先生」には、はなはだ危うい「落とし穴」が存在することもわかった。「捨てられた」論文を拾い上げて自分のものにするのも可能であり、それを正当化するための「自分が指導した結果の産物」との言い訳が用意されている点には注意を要する。

本誌に東北大学出身者の掲載が多いとのそしりは甘んじて受け入れるが、何よりも指導者が優秀な論文を捨て置いたり、「鵜飼い」のように振る舞って若者を踏み台にするような状況を作ってはならない。公正を期しつつ、若手の育成に主眼を置く本誌ならびに編集責任者の意図をこ理解いただければ幸いである。

日本近世美術研究 第三号

令和二年（二〇二〇）十二月二十五日

発行 一般財団法人北島古美術研究所

京都市上京区石薬師町六八九―八

編集責任 東北大学大学院文学研究科

准教授 杉本欣久

〒九八〇―八五七六 仙台市青葉区川内二七―一

電話 〇二一七九五一〇六八（直通）

印刷 株式会社東誠社

仙台市宮城野区岡田西町一―五五 仙台総合印刷団地

電話 〇二一七八七―三三五一